

令和元年6月20日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02561

研究課題名(和文) 対照談話論による日本語談話の発想と表現の研究

研究課題名(英文) A Study on Cultural attitudes and Language Expression Viewed Through the Contrastive Discourse Theory

研究代表者

沖 裕子 (OKI, Hiroko)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：30214034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本語談話の発想と表現について、次のような研究成果を得た。第1に、日本語談話を韓国語談話、中国語談話と比較対照することで、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層全体から明らかにした。第2に、共通語と松本方言の敬語使用を対照させることで、国内の方言談話においても発想と表現の異なりがあることを明らかにした。第3に、外国語および方言間の比較対照を並行して進めることで、談話研究の新たな方法論を開拓し、談話論の進展につなげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、主として次の3点にある。1)日本語談話を韓国語談話、中国語談話と対照させることで、記述的成果をあげたこと、2)日本語の方言談話を対照させることで、国内の談話変種の記述を進めたこと、3)外国語の対照と方言変種の対照を同時に行うことで、談話研究の方法論の開拓につなげたことである。

研究成果の社会的意義は、次の点にある。日本語談話の発想と表現の関係を明示的に理解しうる記述へとつながったことで、第2言語習得を行う日本語学習者が、母語干渉の影響を知り、日本語談話の高度な習得につながったことである。異文化コミュニケーション上の問題点となりやすい点の回避に寄与できたと考える。

研究成果の概要(英文)：The principal findings of this research served to clarify the following three points regarding cultural attitude and language expression. First, a comparison of Chinese, Korean and Japanese demonstrated that differences in spoken discourse can be defined in terms of four layers: a social culture; an attitude; a macrostructure of contents and an expression. Second, it was shown that, compared with standard Japanese, the Matsumoto dialect employs a different set of honorifics and mindset. Third, it was discovered that the two research tasks undertaken, that of comparing foreign languages and that of comparing dialectal variations, were an effective means of developing research methods in the field of discourse theory.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語談話 対照談話論 日韓中対照研究 発想と表現 同時結節 方言談話 判断終助詞 通知終助詞

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 日常的に使用されている表現の談話展開は、その文化が有している発想のしかたに支えられている。
- (2) 談話は、言語表現に閉じたものではなく、なぜそのような言語表現が生まれるのか、談話使用の背景にある発想を明らかにすることが、談話研究にとって重要である。
- (3) 発想と表現の関係を有効に記述説明できない限り、外国語母語話者が、母語母文化の干渉を無意識のうちを受け、不適切な日本語談話を使用して、人格的誤解を受ける不幸な事態はなくなるといえる。
- (4) 談話は、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層が関係し、影響しあって実現しているという談話観に立つ「同時結節モデル」に立つと記述の方法が明確化し、談話の実態記述が進むと考えた。日中韓および国内変種を有効に対照させることによって、日本語談話の発想と表現の関係について多角的に分析考察を進める必要があると判断した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

- (1) 談話研究における方法論の開拓と談話論の整備
- (2) 対照談話論による日本語談話の特徴の解明と記述
- (3) 応用言語学を視野に入れた発想と表現の関係の解明

3. 研究の方法

研究方法における特徴は、以下の4点である。

- (1) 社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層が同時に結節して談話が推進されるとする談話結節モデルを用いた。
- (2) 日本語、韓国語、中国語談話の対照と、国内の方言変種間の対照を並行して進めることで、新たな研究観点を得るようにした。
- (3) 談話における発想と表現の関係を分析考察するために、同時結節する4層すべての記述を試みた。
- (4) 談話研究において、実例観察とともに内省観察を取り入れた。

4. 研究成果

- (1) 談話研究における方法論の開拓と談話論の整備に関する成果は、以下の通りである。

日本語、韓国語、中国語を母語とする日本語研究者が国際共同研究を緊密に進める方法をとることで、内省観察法を談話記述に採用し、活用のしかたの一例を示した。社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層の影響関係があることを実証し、談話の同時結節モデルが有効であることを示した。見えにくい意識態度を分析考察する新たな視点として、談話構築態度という概念が有効であることを実証的に示した。日本語の方言終助詞の分析を通して、談話を使用するときの発想に、表現形式そのものの性格が関与していることを示した。

- (2) 対照談話論による日本語談話の特徴の解明と記述を次のように行った。

日本語、韓国語、中国語の依頼談話を対照させて、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層が関係しあって談話的特徴を形成していることを実証的に記述した。

談話構築態度という新概念から、日本語、韓国語、中国語を実証的に記述した。日本語談話では、話し手と聞き手が離れて立ち(=自他分別)、両者をとりまく場を意識しており(=場面意識)、話し手は、場、聞き手、もの(対象)を見るとともに、聞き手がものをどう見ているかも見、聞き手も、同様の見方をする(=三項関係)。すなわち、話し手と聞き手が相互のものの見方を添わせ、場やものをともにみている。こうして、省略の多い主観的把握文で表現された談話であっても、聞き手は補完的に談話的意味を理解することができる。以上、日本語の談話構築態度の特徴は、自他分別、場面意識、三項関係によって説明された。

韓国語談話では、話し手と聞き手は日本語談話と同様に離れて立つ(=自他分別)が、日本語談話より(ウリの場合は)両者の距離は近い。また、話し手が場を見る意識は希薄で、もの(対象)を見るより相手を見ることに多くを費やし(=自他向かい合い)、お

互いが知り合うことに重点がおかれている（＝相手巻き込み）。そのため、親しい者同士の雑談では、話し手と聞き手がともにもの（対象）のみに目を向け、その話題のみで談話が終わるといことがない。以上、韓国語の談話構築態度の特徴は、自他分別、自他向かい合い、相手巻き込みによって説明された。

中国語談話では、話し手と場は同化して自己内に捉えられている（＝話し手と場の一体性）。このため、談話を語る実体的相手としての聞き手という概念は希薄で、聞き手が意識されるのは自世界の場への登場人物としてである。話し手は、自分の世界のみを見ており、自世界を明確に言語化することを意識している（＝自世界注視）。聞き手は、話し手が表現した自世界に同化して、話し手の談話を理解していく（＝自他同化的理解）。以上、中国語談話の談話構築態度は、話し手と場の一体性、自世界注視、自他同化的理解によって説明された。

共通語と松本方言談話を対照させることで、次のことを明らかにした。松本方言終助詞には、敬意終助詞が豊富にみられることが従来の研究でも指摘されている。これらの敬意終助詞は、近所の親しい目上に、軽い敬意と親愛を同時に伝えられる形式で、共通語敬語が、敬意のみで親しさを表現できないことと異なっている。これらの事実の指摘から、共通語敬語が、上下と親疎の2軸の交差で発想され、表現が選択されていくのに対して、松本方言敬意終助詞による待遇表現は、畏まりと寛ぎ、親しみと改まりという2軸の交差で発想され、敬意終助詞は畏まりと親しみの象限で選択されていくことを論じた。

松本方言における全終助詞を談話レベルで観察し、次のことを明らかにした。文末イントネーションを上昇調にしたとき、[質問]の意味になる終助詞、[押付]の意味になる終助詞、上昇イントネーションをとりにくい終助詞の3種類に分別できた。これらは、他の倚辞を後接せずに動詞等の述語のみで終止する文の文末モードと対応しており、終助詞終止文も、述語終止文も、文終止におけるモードが並行的であることを指摘した。談話使用に影響する文末モードを、新たな視点で再考したものである。

(3) 応用言語学を視野に入れた発想と表現の関係の解明を次のように行った。

日本語、韓国語、中国語の依頼談話を対象に、実例と内省観察によって、発想と表現の巨視的異同を対照的に記述した。依頼行動があって、次に言語選択がある。そのため、社会文化が、意識態度、談話内容、言語表現に影響していることを明らかにした。

日本の日常生活では実利の応酬を手段に関係を深める互惠関係文化が無いのに対し、中国、韓国には、積極的に依頼しあうことによって、人間関係を構築していく互惠関係構築文化がある。

中国社会では、依頼し合うことが「関係(グワンシー)」と呼ばれる社会的きずなを築く手立てとして機能していた。「関係」の間柄では、依頼を基本的に断らないため、頼む側は、依頼相手が実現しやすいように、何をどこまでなぜ依頼するのか、言葉で明確に述べることで、常識ある丁寧な態度だと意識されていた。

韓国社会の互惠関係はウリ(親密関係)の間柄で成り立ち、中国より軽微は依頼の応酬もみられ、一部様式化していた。依頼内容は、相手の現在の状況と自己の実情を言葉で率直に伝えていた。相手の依頼を断ることはできるが、相手が納得する理由が必要であった。

日本社会には、相手に頼むことから始まっていく互惠関係構築文化は無い。自助と、共同体の共助が基本で、個人的な依頼は相手に迷惑をかける行為だと認識されていた。場面意識にもとづいて、状況と心情を間接的に伝えていくことで、相手の察しを待つ依頼表現が選択されていた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

沖 裕子・姜 錫祐・趙 華敏、日韓中対照からみた日本語の談話構築態度 発想と表現の差を説明するモデルの検討、日本研究(韓国中央大学校日本研究所) 査読有、第50輯, 2019、65 - 88

沖 裕子・姜 錫祐・趙 華敏・西尾 純二、依頼談話の発想と表現 異文化接触問題の解決をめざした日韓中対照談話論、社会言語科学(社会言語科学会) 査読有、第21巻第1号、2018、80 - 95

https://doi.org/10.19024/jajls.21.1_80

沖 裕子・姜 錫祐、日本語の談話構築態度 - 日韓相互の情緒的違和感を説明するモデルの検討、日本語学研究(韓国日本語学会) 査読有、第55輯、2018、141 - 158

http://www.jlak.or.kr/modules/doc/index.php?doc=sub4_1&M_ID=204

沖 裕子、談話論からみた松本方言の判断終助詞と通知終助詞、方言の研究(日本方言研究会) 査読有、第3号、2017、217 - 238

沖 裕子、松本方言終助詞の文法体系 談話研究の基礎、信州大学人文科学論集(信州大学人文学部紀要) 査読有、第2号、2015、233 - 250

https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=516&item_no=1&page_id=13&block_id=45

[学会発表](計5件)

沖 裕子・趙 華敏・姜 錫祐「学術サロン発表：日韓中対照談話論の展望と課題」(漢日対比語言学会、2018年8月18日(土) 於蘇州大学：中国蘇州 [共同・筆頭発表者])

沖 裕子、発想と表現からみた長野県方言の敬語 共通語敬語と比較して一、長野・言語文化研究会、2018年2月10日(土) 於あがたの森文化会館、

沖 裕子、韓日対照談話論のこれから、韓国日本語学会第36回国際学術発表大会、於白石芸術大学、ソウル、2017年9月23日、招待講演

沖 裕子、談話論からみた長野県松本方言の判断終助詞と通知終助詞、第102回日本方言研究会、2016年5月13日、於学習院大学

沖 裕子、基調講演 異文化交流と日本語教育：日中依頼談話の異同、2015年8月29日(土) 於中国黒竜江大学、2015年異文化コミュニケーションと日本語教育国際シンポジウム、招待講演

[図書](計3件)

小林 隆編、ひつじ書房、コミュニケーションの方言学、2018、421(沖 裕子、長野方言敬語の発想と表現 敬意終助詞が担う親しみと敬意、pp.251-270)

<http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/ja.ZacFPUkF.html>

陳 百海・趙 華敏主編、黒龍江人民出版社(ハルビン) 跨文化交際与日本語教育研究(異文化交流と日本語教育) 2016、328(沖 裕子、基調講演：異文化交流と日本語教育：中日依頼談話の違い、pp.3-20)

趙華敏主編、高等教育出版社(北京) 跨文化理解与日本語教育(異文化理解と日本語教育) 2015、385(沖 裕子・趙 華敏、第4章 日本語依頼談話の特徴と日本語教育、pp.107-133)

https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main

〔その他〕

ホームページ等

<http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/ja.ZacFPUKF.html>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：西尾 純二

ローマ字氏名：NISHIO, Junji

所属研究機関名：大阪府立大学部局名：人間社会学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：60314340

(2)海外研究協力者

研究協力者氏名：姜 錫祐

ローマ字氏名：KANG, Suk-Woo

研究協力者氏名：趙 華敏

ローマ字氏名：ZHAO, Huamin

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。